# 分科会「手話と歴史」

## 「長岡の手話はいつ頃から始まったのか?」

司会・西滝憲彦　講演者・山岸信治（神奈川県）
助言者・伊藤政雄　記録・中根清隆

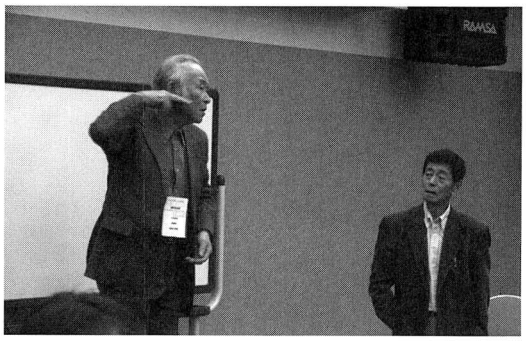
伊藤政雄：

現在の「長岡」という手話は全国で統一されているが、地元の「長岡」表現は昔からあった。顔の頬に人差し指と中指をくっつけて上下交互に動かす形になっている。またはカミソリを革ベルトで研ぐ表現もある。何故このように表しているのか、その由来を教えて下さい。

小平邦幸（長野県）：

昔、長岡聾学校創立者の金子徳十郎の息子で、ろうあ教師である金子進太郎が泣く様子から「長岡」になったのか、カミソリは金持ちのシンボルで、金子家から「長岡」になったのか。さらにろうあ村長横尾義智にも同等で、カミソリ+人を「横尾義智」を指し、カミソリ+場所を昔の「新潟県」を表している。

「長岡」という一つの手話に、いろんな要素が入り交じって混乱している。長岡だけでなく、全国各地にも同じく、一つの手話にいろいろある。



### ■手話もいろいろ、方言と同じ

長岡聾学校は明治時代から創立、新潟聾学校は昭和初めからで、長岡の方が歴史が古く、昭和10～20年の間、長岡の人は手話に特徴があった。当時の東京では手話＋口話であった。

戦後全日本ろうあ連盟が発足し、各県団体が加盟して、交流していくうちに手話が統一されていくが、言葉に方言がいろいろあって、手話もいろいろある。どれが正しいのか、決めつけてはならない。

### ■山岸信治の講演

地元手話「長岡」と「間違い」の使い分けに注意してほしい。生まれてから高３まで長岡で育ってきたが、就職で東京へ行った。東京の手話はきれいに賢く見えて、長岡の手話は下品でアホに見えた。だんだん東京の手話に切り替えてしまった。長く東京にいたため、長岡の手話と長岡弁を忘れてしまった。

しかし、全国に比べると長岡の手話の数が豊富で、今でもトップだと思う。手話で表したい時、長岡のはあるが、東京にはなく、数が少ないということがわかってきた。

山岸信治氏

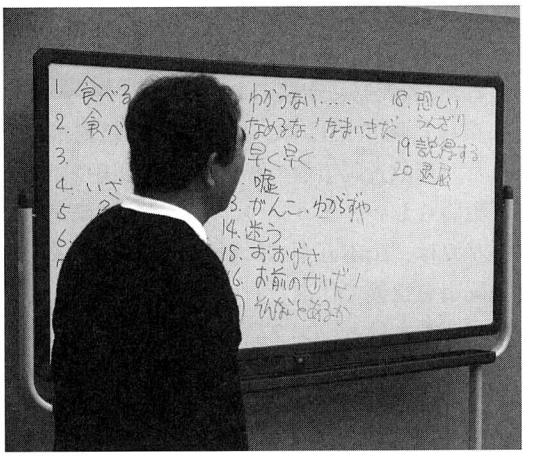
### ■長岡と全国手話の違い

※紙上では表せないので、ご了承下さい

①食べるのはまだだよ
②食べた（大阪同じ）
③行った
④いざ
⑤魚（全国で珍しい表現）
⑥どうでもいいよ

⑦デタラメ
⑧早いもん勝ち
⑨わからない
⑩なめるな・生意気だ
⑪早く早く
⑫ウソ（東京：できない）
⑬頑固・わからずや
⑭迷う
⑮大げさ（東京：ある
⑯お前のせいだ
⑰そんなことあるか
⑱うんざり・恐ろしい（表現強弱によって使い分ける）

⑲説得
⑳退屈（東京と似ている）
㉑迷う（⑭とは違う）
㉒気持ち悪い
※⑳/㉑/㉒手話の形似ているが表現強弱によって違う
㉓あとで
㉔偉くなる
㉕一筋
㉖やり返す
㉗覚えとけ
㉘怠け者
㉙だまされるな
㉚ごまかさないよ
㉛わからない（東京に似ている・⑨とは違う）
㉜生意気
㉝来たばかり
㉞足りない
㉟すっぽかす
㊱面倒くさい
㊲できない
㊳できる
㊴夢中
長岡は手話の宝庫であった。




## ■質問

石黒（栃木）：
　数と教科、失礼の手話は長岡ではどう表す？
山岸：
　数はお金と数珠（そろばん）の形で表している。国語・社会・理科（電気）、失礼を表現。
竹川（富山）：
　富山の手話では国語・理科（ガイコツ）・数学・社会（日本の形）。平気・見たことない（長岡と似ている）→隣り県でも似ていたり違ったり。
田中（長岡聾学校同窓会会長）：
　下手・新潟を表現。「長岡」は金子先生の涙が

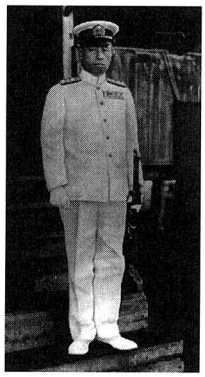
有力になっている。

## ■対談　山岸と地元ろう女性

①そうだ
②無我夢中
③どうやってわかった
を対談で表現。

全国に手話はいろいろあって、長岡にもある。あれこれ間違いを指示しないこと。お互い地元の手話を大切にして行きたい。

## ■山本五十六についてのエピソード ろうあ者・関係者との関わり



お話・伊藤政雄

日本において最も有名な軍人は、山本五十六元帥で長岡出身でもある。昭和16年12月８日のハワイ真珠湾奇襲戦の最高指揮者であり、その名前が世界中に轟いた。昭和20年８月1日、長岡市は大空襲に見舞われた。新潟県に空襲のあった都市は長岡市だけで、大きい筈の新潟市はなかった。何故長岡市なのか、近くの油田や軍需工場が狙いらしい。もう一つ、ハワイ真珠湾奇襲でアメリカは、山本五十六に恨みがあって、その故郷長岡市を空襲で仕返しした説があるとか。

山本五十六はトランプ名人で賭け事に強く、外交官時代にはよく相手の外国人を負かした。ある時、トランプ最中「コロラド」と何気なく口すさんでは、アメリカ人の心理を突いた。誰も知らないはずの戦艦コロラド建造中ということを、山本五十六がほのめかしていたことに、アメリカ人はギクッと冷や汗をかいたのだ。

昭和10何年頃のある夏休み、ろうの少年二人は将棋をやろうと、緑陰ある聾学校の方が涼しかろうと、そこへ行った。いつの間にか50代のおじさんが、将棋の進み具合をニコニコ見つめながら立っていた。二人はそのおじさんが誰なのか知る由もなかった。一人が負けそうな時、山本は回っては、こうすればよいと駒を勧めた。するとたちまち有利になり、次は逆に追いつめられた方へ回って、アドバイスするとまた逆転になった。山本がその場を離れて去って行くと、二人の少年は、ポカンとあっけにとられてしまった。

やがて二人は、新聞で山本五十六戦死の顔写真を見て、初めてあの時のおじさんが山本五十六であったと気づき、驚いた。聾学校の先生に聞くと実家が近く、帰省の折によく聾学校へ行ったり来たりしたそうだ。校舎の中であの有名な山本五十六に、将棋を教えてもらったと思うと、二人の少年は泣いてしまった。少年二人は今、生きているかどうかお会いしてみたい。

東京聾唖学校校長小西信八は昭和13年亡くなり、葬儀が寺院で学校を挙げて行われた。私は入学まもない頃だが鮮明に覚えている。参列に山本五十六が見えると、生徒もみんな腰を抜かんばかり驚いた。軍人で一番偉い方であり、凛々しい軍服姿の方がこんな葬儀にお出ましとは、思いも寄らなかったそうだ。

山本五十六と小西信八は同郷者で幼なじみ、学校で同じ釜の飯を食い、親しい間柄なのだ。このようにして、山本五十六はろうあ者と関係が深かったことを改めて知っておきたい。

ちなみに「山本五十六」という手話は、両手こぶしでグルグル回る仕草なのが、由来はまだわかっていない。ある説では、若い時、日本海戦の被爆で右手二本指を失い、包帯を巻いたということから生まれたとか?二本指を失った山本五十六も障害者であり、これもまた何かの因縁であろう。